

教育学研究科・グローバル教育展開オフィス

黒星 きらら・教育認知心理学・博士課程3年

国際学会：31th International Congress of Applied Psychology(ICAP2026)

参加地・期間：イタリア・フィレンツェ 2026年7月21日～25日

発表題目：Cultural Differences in Conformity on Social Media: The Roles of Independent and Interdependent Self-Construals

成果の概要

イタリア・フィレンツェで開催された International Congress of Applied Psychology (ICAP 2026) に参加し、「Cultural Differences in Conformity on Social Media: The Roles of Independent and Interdependent Self-Construals」という題目で研究発表を行った。本学会への参加は、自身の研究発表に加え、国際的な心理学研究の動向を把握し、世界的に注目されている研究テーマや方法論について理解を深めることも重要な目的であった。

実際に参加したことで、学会全体を通して、近年の応用心理学が扱うテーマや方法論の変化を肌で感じることができた。特に印象的であったのは、AIやデジタル技術と心理学を融合させた研究、ウェルビーイングやメンタルヘルス、持続可能性 (Sustainability)、働き方やキャリア、多様性・包摂など、現代社会が直面する課題を心理学の視点から解決しようとする研究が数多く発表されていたことである。「心理学が持続可能な社会の実現にどのように貢献できるか」という視点が重視されており、心理学を社会実装へつなげる姿勢が強く感じられた。

また、研究方法についても、従来の質問紙調査だけではなく、オンライン実験や縦断調査、AIやVRなどのデジタル技術を活用した研究、生理学的指標を組み合わせた研究など、多様なアプローチが用いられていた。単に理論を検証するだけでなく、実社会での介入や政策、教育、産業場面への応用を見据えた研究が多かったことも印象に残った。自身の研究と比較しながら各発表を聴講することで、研究テーマだけでなく、研究デザインや分析方法、結果の示し方など、多くの学びを得ることができた。

今回発表した研究では、日本と英国の参加者を対象に、SNS上での同調行動と文化的自己観の関連を検討した。従来は文化差によって説明されることの多かった同調行動であるが、SNSという国境を越えたコミュニケーション空間では、その影響が必ずしも明確ではないという結果が得られた。仮説どおりの結果ではなかったものの、「なぜ予想と異なる結果になったのか」を考察する過程で、SNSという環境そのものが文化差を小さくしている可能性や、近年のグローバル化の影響など、新たな研究課題が見えてきた。また、その背景について丁寧に考察した点に関して、ほかの研究者から共感や興味深いという反応をいただき、研究の意義を改めて実感した。この経験を通して、期待した結果が得られなかったとしても、その理由を丁寧に考察することが研究を発展させる上で重要であると考えた。

発表においては、事前に英語のスクリプトを準備していたが、本番で想像以上に落ち着いて発表することができ、一度もスクリプトを見ることなく、終始リスナーとアイコンタクトを取りながら説明を行うことができた。発表を重ねる中で培ってきた経験が活かされ、自分の言葉で研究内容を伝えることができたことは、大きな自信につながった。

また、会場では複数の発表が近接したスペースで同時に行われていたため、周囲の音に埋もれないよう、スライドを指し示したり、ジェスチャーを交えたりしながら説明を行うことを意識した。言葉だけに頼るのではなく、視覚的な情報も活用することで、聞き手に研究内容をより分かりやすく伝える工夫をすることができた。

今回の支援は、経済的な支援という側面だけでなく、国際学会への参加を後押ししていただけたこと自体が、大きな励みとなった。実際に参加したことで、自身の研究を国際的な視点から見つめ直す貴重な機会となり、今後も積極的に国際学会へ参加したいという意欲が一層高まった。そのためにも、日々の研究を着実に積み重ね、今回得られた知見や研究者とのつながりを今後の研究に活かしていきたい。